

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要 旨
学位申請者	洲崎 圭子【論文博士】 【比較社会文化学専攻 平成19年度生】 (平成28年3月31日 単位修得退学)	<p>本論文は、20 世紀半ば、メキシコが家父長制を基盤とした近代国民国家の創成を急いだ時期に、知識人階級として、政府機関職員、大学教授、外交官を歴任しつつ、精力的に詩やエッセイ、戯曲、小説を発表した女性作家ロサリオ・カステリャノス Rosario Castellanos (1925～1974) による先住民世界や女性を扱った小説作品を主な対象として、先住民世界／白人世界、地方／都会、第一世界／第三世界、政府側／大衆側等さまざまな境界を往還し、一貫して複雑かつ抑圧された多種多様な女性の状況を描くことに専心したカステリャノスを、メキシコの社会歴史的な文脈の内に位置づけ、その作家としての功績を再評価した論考である。</p> <p>論文は二部構成をとり、第一部では、第三世界とされたメキシコで、作家が女性問題を主テーマとするようになった経緯が検証される。知識人が頻繁に政権とかかわる立場におかれるラテンアメリカでは、上層階級出身の女性の知識人として、カステリャノスは複雑な立場に置かれる。一方で、大農園主の一家に育ち、一家においては女性として主体的な存在を許されず、かつ先住民族の小作人と直接に関わる機会を頻繁に得た出自が、一枚岩で語ることのできない多様な女性とそれにまつわる問題を考察する修士論文や後の小説作品の一貫したテーマ設定に影響したことを説得的に論証する。</p> <p>その上で、第二部では、最初の長編小説『バルン・カナン』を中心に、具体的な作品が分析される。階級や人種問題、マチスモ言説、農園主の振る舞いや一族の独身女性の疎外感と帰属意識、子を産めない先住民族の女性、産まない選択をする白人女性等々を検討、男女がともに家父長制のジェンダー規範に縛られた社会が描出された作品群を、人種、階級、地域、歴史の視座を交差させて丁寧に分析した。特に作品に描かれる女性間の差異に注目し、多様な女性の生き方についての物語として再読したことにより、主に中産階級の女性から発信された欧米中心の当時のフェミニズムとは異なり、カステリャノス作品が第三世界からのフェミニズムの発信であったことが確認される。</p> <p>本論文は、上層階級の知識人女性作家として、政情や検閲を意識せざるをえない複雑な状況に身を置きつつ、時に政権寄りの公的立場から、時に先住民族の女性の視点から、常に疎外される多様な女性たちを描き続けた作家としてのカステリャノスを丹念に跡付け、その第三世界のフェミニストとしての功績を明らかにした研究の成果である。先行研究については、英語圏のものを含め網羅的に精査されており、その意味でもわが国の今後のメキシコ現代文学研究に大きく貢献することが期待される。</p>
論文題目	ロサリオ・カステリャノス研究 -錯綜する周縁化を生きて-	
審査委員	(主査) 教授 戸谷 陽子	
	准教授 高桑 晴子	
	准教授 中野 裕考	
	教授 松崎 毅	
	教授 野谷 文昭 (名古屋外国語大学)	

